

# 今日の市場問題と市場理論

三好正巳

## 目次

はじめに

### 第1章 資本の理論における市場の位置

第1節 分業と市場

第2節 資本と市場

### 第2章 市場における価格変動と競争

第1節 需要・供給と価格変動

第2節 市場における競争

むすび

## はじめに

市場問題は、それが論議されるときには、常に経済体制にかかわることに注目する必要がある。しかも、マクロ的規模での経済体制が、ミクロ規模で検討されるのは、具体的な経済政策をめぐる論点が別決されることを意味する。W.ブルスとK.ラスキは、その著作の序文の中で、冒頭次のように述べている。「われわれが本書の執筆を思い立ったのは、経済体制としての社会主義に関するわれわれの立場を再検討しようという強い欲求に駆られてのことであった。われわれは二人ともかってそれぞれのやり方で、過剰資本、過剰労働力、それに充足されない欲求の共存という、マクロ的規模での資本主義の非合理政策を克服する能力があるかに見える社会主義経済に魅せられたのであった。当初、この能力をミクロ経済的効率と結びつける可能性は、たんに時間の問題であるかのように思われたし、計画技法の完成と、新しい社会主義の人間の協力的行動の全面的な発展がそれを可能にすると思われたのである。」<sup>1)</sup>と。また、F.A.ハイエクは、「われわれが合理的な経済秩序を建設しようと努めるときに、解決したいと思う問題は何か。」と問う。そして彼は、「合理的な経済秩序の問題に特有な性格は、われわれが利用しなければならぬ諸事情の知識が、集中された、あるいは統合された形態においてはけっして存在せず、ただ、すべての別々の個人が所有する不完全でしばしば互いに矛盾する知識の、分散された諸断片としてだけ存在するという事実によって、まさしく決定されているのである。」<sup>2)</sup>と。それぞれの主張には、立場にしても方法にしても違いがあるが、ともかくミクロ的規模の問題を重要視することでは同じである。とはいえ、市場問題を経済体制とのかかわり、あるいは経済秩序とのかかわり

について、そのかわり方には決定的な違いがある。この違いは、P.M. スウィージーが試みた市場と社会主義経済との両立性の問題にもかかわるものである。その場合、P.M. スウィージーは両立不可能とし、W. ブルスらは両立可能とする。F.A. ハイエクは、「効率のよい経済体制」を「われわれに利用可能な資源の配分に関する相互連関的決定の複合体」としている。こうした問題にあるのが、市場問題の理論的内容である。

ところで、市場問題が提起される現実の経済的状况において、今日、市場問題が意味するところは、経済学の有効性ないしその存立にかかわるものとなっている。すなわち、経済学の有効性ないし存立の問題は、社会主義市場では旧ソ連・東欧諸国の経済改革が政治変革を避けられなかったこと、資本主義市場ではアングロアメリカン・スタンダードによる国民経済の塗りつぶしが進行していること、こうした政治的・経済的状况とともに発生したといえる。また、この問題が新たなグローバルなものとして登場したのは、時期的には旧ソ連についてはペレストロイカの失敗、連邦から国家連合への転換、東欧諸国については「東欧革命」、したがって1980年代末から1990年代初頭の時期に当たる。また、アングロアメリカン・スタンダードについては、ウルグアイ・ランドの終結が遅れるなかで相互主義（reciprocity principle）が市場開放を推進する主要な手段となった時期、EU委員会が相互主義の概念について公式見解を発表したのが1988年である。そうしたなかで地域主義（regionalism）が進行する時期、すなわち1987年の単一欧州議定書（Single European Act）の発効、マーストリヒト条約が調印されたのが1992年である。

そして1990年代末から2000年のいまでは、金融の国際化が世界同時に進行するところのグローバルライゼーション（globalization）にたいして、国民経済に与える影響を考慮して、ヘッジホンド規制のように金融市場においては部分的ながら規制が加えられようとしている。そして今日、こうした規制の動きがどこまで進行するのかなお不鮮明であるなか、あるいはアメリカの「好況」に支えられた世界市場がますます不安定となるとも思われる兆しのなかで、改めて市場問題にたいする理論的検討が要請されていると言えよう。

市場問題をとらえるときに、いまひとつ考慮されねばならない問題がある。それは、市場そのものの性格でありその構造である。すなわち、今日の市場の性格は体制間で分断された市場でなく、統一的な世界市場として捉えられなければならない。しかし、ガットが掲げてきた自由・多角・無差別の原則（multi-lateralism）を追求ものといいつつも、二国間主義（bilateralism）の相互主義やEU（欧州連合）、NAFTA（北米自由貿易協定）、APEC（アジア太平洋経済協力会議）、MERCOSUR（南米南部共同市場）の地域主義によって、自由・多角・無差別の原則がゆらぐことになった統一的な世界市場である。さらに、多国籍企業による市場ネット、金融のグローバルライゼーションなど、世界市場の構造は以前にはみられないような様相を示している。そうした性格の市場である。

また、市場問題、正確にいえば資本にとっての市場問題を発生させる市場は、構造をもった市場である。この市場構造は、世界市場と国民市場ないし共同市場、金融市場と商品市場など多様な構造をもっている。このように市場構造は多様である。しかし、今日の市場問題を解明するための市場理論としては、世界市場と国民市場ないし共同市場、金融市場と商品市場について、これらを捨象することはできないだろう。市場理論としては、こうした市場構造まで上向き具体化する必要がある。この上向き・具体化の過程は、まずは資本一般にとっての市場における諸要素と

諸関係の体系化，その法則をまずは明らかにすることである。そのうえで、「競争の叙述」すなわち資本の特殊性における分析にいたることとなる。市場問題は，この「競争の叙述」にいたらねば，新たな理論的展開をなしえないであろう。

しかしながら，これまでの経済学において，市場それ自体がどのように扱われてきたか，この点の検討が，まず始められなければならない。検討の対象としなければならない経済学は，今日多様に分岐した経済学諸派にわたる広範な諸理論でなければならないが，本稿で取りあげるのは，主として政治経済学である。ここで，まず政治経済学を選択したのは，今日の市場問題を分析する場合に，市場の何よりも定性分析が必要であると痛感するからである。今日の市場問題は，資本にとっての市場の困難を表したものであり，それゆえに市場の定量分析よりも定性分析こそ必要だと理解するからである。もちろん，市場そのものについては，主としてスミス，ときにリカードに言及はしているが，J. S. ミルには触れておらず，その限りでは古典派についての立ち入った分析はなく，したがって，A. マーシャル以下については全く触れていない。また，必要な場合は，ただ，「新古典派」—どのように規定し，どこにその主流を認めるかは別として—としてではなく，価格理論，ミクロ経済学の内容を取り上げただけである。

かくて，本稿では，マルクスおよびエンゲルスの経済学にかんする諸文献について，市場をいかに扱ってきたかを辿るとともに，そこから今日の市場問題にいたる進展の方向を探ることとする。これが本稿の課題であり，市場問題を，資本による統括された市場が，いかに市場を組織化するか，またその組織化は，社会的になにをもたらすか，これが本稿の課題を追及する究極の意図である。

- 1) W. ブルス/K. ラスキ著，佐藤経明・西村可明訳『マルクスから市場へ—経済システムを模索する社会主義—』岩波書店，1995年，「序文」vページ。
- 2) F. A. ハイエク，田中真晴／田中秀夫編訳『市場・知識・自由—自由主義の経済思想—』ミネルヴァ書房，1986年，52～53ページ。

## 第1章 資本の理論における市場の位置

### 第1節 分業と市場

市場という概念について，レーニン<sup>3)</sup>は，市場という概念が社会的分業の概念と不可分のものであると指摘し，「社会的分業と商品生産とがあらわれるところに，また，あらわれるかぎりで，『市場』が現れる。そして市場の大きさは，社会的分業の専門化の程度と，不可分にむすびついている。」と述べている。さらにレーニンは，マルクスの『資本論』を引用した上で，「資本主義社会が存在するところでは，市場の発展にたいする限界は，社会的労働の専門化の限界によって立てられる。ところで，この専門化は，その本質上，技術の発展と同じように，限らないものである。」とし，機械などの使用による特殊な生産となることが必要だという。こうした一面に加えて，「他面では，資本主義社会における技術の進歩は，労働の社会化にある。」とし，この社会化は，生産過程の各種の機能の専門化を社会化されて一つの新しい経営に集中され，かつ社会全体

の欲望充足を目当てとする機能に転化することを、必然的に要求するとしている。<sup>4)</sup>

このレーニンの市場の理解では、生産力の発展にともなう市場の形成、そこにおける資本による統括の過程が解明されている。そして、その論理の展開は、商品生産したがってまた資本主義的生産とその一般的基礎である社会的分業が現れるところに、市場が現れるということにある。市場にとって、分業はきわめて重要な位置に置かれている。分業は、Arbeitsteilung ないしは Teilung der Arbeit であり、division of labour である。労働の分割であることは、マルクスにおいてもスミスにおいても同じである。スミスは、『諸国民の富』の「序論および本書の構想」において、年々の労働の生産物が年々の消費を充足するものであり、十分に充足されるかどうかは、人口にたいする生産物の割合によるとする。そしてこの割合は、労働の熟練等々と有用な労働者の割合とによって規定され、しかも有用な労働者の割合よりも熟練等々によっていっそう多く規定されるとして、「労働の生産諸力におけるこの改善の諸原因と、またその生産物に分配される秩序」とが、「第1編」の主題だとしている。<sup>5)</sup>この主題において、スミスは、第1編の第1章を分業から開始する。ここでは、分業が労働の諸生産力を増進させることが述べられ、第2章で分業をひきおこす原理として分業が人間の本性のなかにある交換性向から生じ、この性向は利己心に刺激されて分業へと導かれるとされる。そして第3章で「分業をひきおこすのが交換力 (power of exchanging) であるように、その分割の範囲もまたつねにこの力の大きさによって、いいかえれば、市場の広さによって制限されざるをえない。」<sup>6)</sup>と論じている。つづいて、第4章では、分業が確立すると、あらゆる人々が交換することによって生活する商業社会に成長すること。そこでは労働生産物が商品となり、商品交換が普及するために、あらゆる商品と交換可能な特定の商品が生みだされ、やがて鑄貨された貨幣となることが、述べられる。貨幣の媒介によって、すべての種類の財貨は売買され、また互いに交換されるとき、商品の交換価値を決定する諸法則の解明が試みられる。そしてスミスは、「諸商品の交換価値を規定する諸原理」を究明するために、(1)諸商品の実質価値 (real price) はどのようなものに存するか (すなわち交換価値の真実の尺度 (measure) とはどのようなものであるか)、(2)この価格の異なる諸部分とはどのようなものであるか (実質価値はどのような部分から構成されているか)、(3)なぜ市場価格 (market price) はときどきこの価格から離反するか、(実際価格 (actual price) が自然価格 (natural price) と正確に一致することを妨げる諸原因はどのようなものであるか)、以上三つの問題を立て、<sup>7)</sup>つづく3つの章で展開している。

これにたいして、マルクスは、「フォイエエルバッハ」(『ドイツ・イデオロギー』第1部)において、分業について次のように述べている。「一民族の労働の生産力がどれほど発展しているかを最も歴然と示すものは、分業の発展度である。それぞれの新しい生産力は、それがこれまでにすでに知られた生産力のたんに量的な拡張 (たとえば地所の開墾) のでないかぎり、分業の一つの新しい形成をもたらす。」と。また、「分業の発展段階がいろいろことなるにしたがって、所有の形態もいろいろことなっている。すなわち、そのつどの分業の発展段階は、労働の材料と労働用具と生産物との関係における、個人相互間の諸関係をも規定する」と、述べている。<sup>8)</sup>さらに、分業の発展について、「労働の分割は、物質的労働と精神的労働との分割が現われてくる瞬間からはじめてほんとうに分割となる。」しかし、分業はそれ以前に「『自然発生的に』生じる場所の労働の分割」として存在していたという。<sup>9)</sup>「物質的労働と精神的労働という分割は都市と地方の分離である。<sup>10)</sup>労働の分割の次の段階は、「生産と交易の分離、商人という特別な階級の形成だった

……<sup>11)</sup>」この段階が、マニファクチュアを発生させ、大工業を発展させた。この大工業のもとで、「生産力をしのぐこの需要が原動力となって中世以後の私的所有の第三期がもたらされた。この原動力のおかげで大工業—工業目的への自然力の使用、機械装置およびことなまでひろげられた分業—が生みだされたのだからである。」<sup>12)</sup>という。

分業そのものについての理解には、「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。同時に、分業は、この化体が成功するかどうかを偶然にする。」という限りでは、マルクスとスミスに大筋についての違いはない。しかし、「とはいえ、ここでは現象を純粹に考察しなければならず、それゆえその正常な生起を前提としなければならない。それに、とにかく現象が生起するならば、つまり、商品が売れないのでないならば、商品の形態変換は、変則的にこの形態変換で実体—価値量—が減らされたり加えられたりすることがあるにしても、つねに行われているのである。」という引き続きマルクスの主張<sup>13)</sup>とは、スミスは異なる。すなわち、マルクスは、次のようにいう。「このように、商品は貨幣を恋いしたう。だが、『まことの恋がなめらかに進んだためしはない』[“the course of true love never does run smooth”]。分業体制のうちにそのばらばらな四肢[membra disjecta]を示している社会的生産有機体の量的な編制は、その質的な編制と同じに、自然発生的であり偶然的である。それだから、われわれの商品所有者たちは、彼らを独立な私的生産者にするその同じ分業が、社会的生産過程とこの過程における彼らの諸関係をを彼ら自身から独立なものにするということを発見するのであり、人々の相互の独立性が全面的な物的依存の体制で補われていることを発見する<sup>14)</sup>。」と。ところがスミスは、この「化体」の偶然性を、また商品の形態変換の「変則的」な形態変換を問題にするのである。

この「化体」について明らかにされるべきことは、次のような内容においてである。すなわち、分業は社会的生産過程およびその過程における諸関係から、その当事者を私的生産者として独立させるが、その独立性は物体依存の体制で補われている。また、この物的依存体制は、労働生産物の商品へのひいては貨幣への転化である。商品の形態転化すなわち「化体」は、現象を純粹に、一般的に理解しようとするれば、その偶然性は捨象されねばならない。マルクスが捉えようとしたものは、まさに分業体制の社会的諸関係、別の言い方をすれば、労働の技術的諸過程に対応する労働の社会的諸編成である。これに対して、スミスが捉えようとしたのは「化体」の偶然性あるいは変則であり、それは市場における変動でありつまるどころ阻害を含む循環の問題である。ここでは、このことだけを指摘しておく。

さらに、「分業の発展段階がいろいろことなるなるにしたがって、所有の形態もいろいろことなっている。」というマルクスの認識は、スミスではどうであろうか。スミスの『諸国民の富』では、「資財」は未開社会では必要なく、分業が十分に行われるようになって必要となるとし、資財の蓄積と分業とが相伴って進むことが指摘される。そして、資財の蓄積は、産業活動とその生産力に影響することが述べられる。また、スミスは、資本の成立について、人は所有する資財が僅少な場合は収入を得ようとはせず、直接の消費に余るほどになると、その剰余から収入を得ようとしてつとめるとする。いまや、資財は、「収入を彼に与えると彼が期待する部分は、彼の資本(capital)と呼ばれる。他の部分は彼の直接の消費を満す部分」を構成することで形成されることになる<sup>15)</sup>。スミスの分業論の所有および所有形態についての理解は、以上のようなものである。そ

ここでは、資本は歴史的・社会的に形成されるよりも、個人ないし社会で蓄積された資財が種類または部門に分かれるものとして理解されている。続いてスミスは、「社会の一般的な資財の一種特別の部門としての貨幣」の性質および作用をとりあげる。「蓄積されて資本となった資財」は、それを所有する人々が使用することもあり、また他の誰かに貸し出すこともある。資財のこの二つの「資格」において作用する有様、資本の諸種の用途が国民の産業活動と土地および労働の年々の生産物との量に及ぼす効果が、スミスでは論じられている<sup>16)</sup>。

マルクスは、等価物の交換という純粋な方法で貨幣がある程度蓄積されるが、それはとるに足らない源泉でしかなく、「本来の意味での資本、すなわち産業資本に転化されるのは、むしろ、高利貸付—とくにまた土地所有にたいしてなされた高利貸付—によって、また商人利得によって溜め込まれた [aufgehäuft] 動産、すなわち貨幣財産である。……それらがそれ自身資本の形態として現われるのではなく、より以前の財産形態として、資本にとっての前提として現われるかぎりであり、……。」と述べている<sup>17)</sup>。分業、すなわち分業にもとづく協業、それは生産力の発展段階を捉えたものである。生産力の発展は、労働の社会化の進展である。問題は、この労働の社会化が、商品の形態転換という「体制」（物的依存の体制）のもとで行われることである。その「体制」では、「化体」の偶然性、変則的な形態転化がおきうる。しかも、物的依存の体制で補われたのは、独立した私的生産者をもつ関係である。私的生産者の生産が資本主義的生産に発展すれば、彼らをもつ関係すなわち市場における交換関係は、資本の本性にもとづく営為によって、「化体」の偶然性、変則的な形態転換は規定されることになる。そこで、次に、資本による市場の統括（労働の社会化における組織性）を取り上げることにする。

## 第2節 資本と市場

資本の形成は、市場における競争を論ずるために、まずは明らかにしなければならない問題である。貨幣が成立したあと、貨幣の資本への転化が取りあげられる。マルクスはいう。「商品流通は資本の出発点である。商品生産と、商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的な前提をなしている。世界貿易と世界市場とは、一六世紀に資本の近代的生活史を開くのである。商品流通の素材的な内容やいろいろな使用価値の交換は別として、ただこの過程が生み出す経済的な諸形態だけを考察するならば、われわれはこの過程の最後の産物として貨幣を見いだす。この、商品流通の最後の産物は、資本の最初の現象形態である。歴史的には、資本は、土地所有にたいして、どこでも最初にはまず貨幣の形で、貨幣財産として、商人資本および高利資本として相対する。……どの新たな資本も、最初に舞台に現われるのは、すなわち市場に、商品市場や労働市場や貨幣市場に姿を現わすのは、相変わらずやはり貨幣としてであり、一定の過程を経て資本に転化すべき貨幣としてである。」<sup>18)</sup>と。貨幣としての貨幣と資本としての貨幣は、さしあたり両者の流通形態の相違で区別されただけである。「商品流通の直接的形態は、」 $W-G-W$ 、商品の貨幣への転化と貨幣の商品への転化、買うために売る、である。しかし、この形態と並んで、われわれは第二の独自に区別される形態、すなわち、 $G-W-G$  という形態、貨幣の商品への転化と商品の貨幣への再転化、売るために買う、を見いだす。その運動によってこのあとのほうの流通を描く貨幣は、資本に転化するのであり、資本になるのであって、すでにその使命から見れば、資本なのである。<sup>19)</sup> 循環  $W-G-W$  は、この商品は流通から出て消費され、それゆえ消費、<sup>20)</sup>

欲望充足、つまり使用価値が循環の最終目的であり、循環  $G-W-G$  は、貨幣の極から出て同じ極に帰る。この循環の起動的動機も規定的目的も交換価値そのものである。単純な商品流通では、両方が同じ経済的形態をもっている。どちらも商品であり、同じ価値量の商品であるが質的には違う使用価値である。ところが、流通  $G-W-G$  では、どちらの極も同じ経済的形態をもつ貨幣であり、質的に違う使用価値ではない。この交換が無目的でないとすれば、両極の質的相違ではなく量的相違によってのみ内容をもつ他はない。「最初に前貸しされた価値は、流通のなかでただ自分を保存するだけでなく、そのなかで自分の価値を変え、剰余価値をつけ加えるのであり、言い換えれば自分を価値増殖するのである。そして、この運動がこの価値を資本に転化させるのである。<sup>21)</sup>」これが、マルクスの説くところである。

資本は、まずは市場に貨幣として現われ、しかも「一定の過程を経て資本に転化するべき貨幣」として現われる。マルクスは、「資本の一般的定式」を述べたうえで、この一般的定式の矛盾を明らかにする。貨幣が資本に成長する場合の流通形態は、商品や価値や貨幣や流通そのものの性質について単純な商品流通で展開されたすべての法則に矛盾している。すなわち単純な商品流通では、使用価値に関しては両方が得をする取引であるが、交換価値では等価交換であり得をする取引ではない。「それだから、商品流通を剰余価値の源泉として説明しようとする試みの背景には、たいていは一つの取り違えが、つまり使用価値と交換価値との混同が、隠れているのである<sup>22)</sup>」と、マルクスはいう。「等価物どうしが交換されるとすれば剰余価値は生まれえないし、非等価物どうしが交換されるとしてもやはり剰余価値は生まれえない。流通または商品交換は価値を創造しないのである。<sup>23)</sup>」

資本に転化すべき貨幣の価値変化はこの貨幣そのものには起こりえない。同様に、第二の流通行為、商品の再販売からも変化は生じない。変化は、その商品の使用価値そのものから、すなわちその商品の消費から生ずる他はない。こうして、マルクスは、価値の源泉であるという独特の性質をその使用価値がもっているような一商品、すなわち労働力商品の売買に行きつくのである。

ところで、市場を資本の循環から見れば、資本家が商品市場および労働市場に買い手となって現われ、貨幣が商品に転換される。流通行為  $G-W$  を通過する第一段階と、資本家が売り手として市場に帰ってきて、商品が貨幣に転換する。つまり流通行為  $W-G$  を通過する第三段階である。これらの形態を研究対象とするにあたっては、次の前提がおかれる。資本の諸変態と循環において、形態転換そのものにも形態形成にも関係のない契機が捨象される。すなわち、商品は価値どおりに売られ、この売りが不変の事情のもとで行われることが想定される。したがって循環過程でおこりうる価値変動も無視される。資本循環における価値変動は、ただ生産資本が機能するなかで生じる。ちなみに、第二段階は、買われた商品の資本家による消費、すなわち資本は生産過程を通過する。その結果は、それ自身の生産要素よりも大きい価値をもつ商品となることである。<sup>24)</sup>

価値増殖という資本の本性からすれば、資本循環の最も一般的な定式は貨幣資本の循環  $G-W \cdots P \cdots W'-G'$  である。その第一段階  $G-W$  は、その内容から見れば  $G-W \left\langle \frac{P_m}{A} \right\rangle$  である。この行為の根底にあるのは、生産諸要素の分配であり、これらの要素のうち対象的諸要因は一方の側に集積されており、労働力は対象的諸要因から分離されて他方の側に孤立している。<sup>25)</sup> 第二段階は、第一段階の結果として資本の生産段階の開始である。この運動は  $G-W \left\langle \frac{P_m}{A} \right\rangle \cdots P$  として

表わされる。また、この運動では、G—A は、資本家がしたがって貨幣資本が、労働者したがって労働力（商品）と相対していなければならない。「つまり、このような状態は、すでに、商品としての生産物の流通の、したがってまた商品生産の規模の、ある程度の高さを必要とするのである。賃労働による生産が一般的になれば、商品生産がたえず増進すること、すなわち商品として一定の資本によって生産される生産物がますます特殊化されていくこと、互いに補足し合う諸生産過程がますます独立な諸生産過程に分かれて行くことを必然的にする。<sup>26)</sup>」G—A が発展する同じ度合いでG—Pm が発展する。「すなわち同じ度合いで、生産手段の生産が、それを生産手段とする商品から分かれて行く。生産手段は、どの商品生産者にたいしても、それ自身商品として、すなわちこの生産者が生産するのではなく彼が自分の特定の生産過程のために買う商品として、相対する。<sup>27)</sup>」第三段階 W'—G' では、商品は、すでに価値増殖された資本価値の、直接に生産過程そのものから生じた商品資本になる。「資本は、商品形態にあっては商品機能を行わなければならない。資本を構成する諸物品は、はじめから市場のために生産されたもので、売られなければならない。貨幣に転化されなければならない。つまり W—G という運動を通らなければならない。<sup>28)</sup>」

一般的にいて資本（貨幣資本）の循環は、第二段階の中断（生産過程）をはさんで第一段階と第三段階で市場における流通を経過する。第一段階の流通 G—W と第三段階の流通 W'—G' の二つの流通における変態では、どちらも同じ大きさの同時に存在する価値存在が相対して互いに置き換えられる。価値変化は、ただ変態 P すなわち生産過程だけで起こる。「したがって、生産過程は、流通の単に形態的な諸変態にたいして、資本の実質的な変態として現われる。<sup>29)</sup>」

こうして、市場は、各段階に分けてみれば、流通の単に形態的な変態でしかない。仮にこの流通が滞るとしても、それ自体として意味があるわけではない。しかし、資本の総循環としてみれば、この二つの流通で起きる阻害は、生産過程のしたがって剰余価値生産が滞ること、価値実現ひいては剰余価値の取得を阻害するということで、資本の存在を部分的ないし全部的に否定するということである。それは、資本主義社会にとって許されない問題である。これこそ、資本にとって市場の最も重要な意味である。

また、資本の循環は、貨幣資本の循環、生産資本の循環、商品資本の循環の三形態をもっている。生産資本の循環  $P \cdots W' - G' - W \cdots P$  ( $= W - G - W$ ) は、生産資本が周期的に繰り返される機能、つまり再生産である。ここで、流通は最初の極の生産資本 P と最後の極の生産資本 P とのあいだを中断し、またそのあいだを媒介するだけである。すなわち「本当の流通は、ただ、周期的に更新され更新によって連続する再生産の媒介として現われるだけである。<sup>30)</sup>」総流通は、価値規定を無視すれば貨幣資本の循環形態  $G - W - G$  ( $G - W \cdot W - G$ ) とは反対の形態  $W - G - W$  ( $W - G \cdot G - W$ )、つまり単純な商品流通の形態である。<sup>31)</sup>「生産資本の循環は、古典派経済学が産業資本の循環を考察するさいに用いている形態である。<sup>32)</sup>」商品資本の循環  $W' - G' - W \cdots P \cdots W'$  ( $= W - G - W$ ) は、流通形態としては生産資本のそれと流通形態は同じである。ちなみに、貨幣資本の循環は  $G - W - G$  であり、異なる。また、商品資本の循環  $W' \cdots W'$  は、貨幣資本の循環  $G \cdots G'$ 、生産資本の循環  $P \cdots P$  とは異なる。 $G \cdots G'$  にしても  $P \cdots P$  にしても、その終点の G' と P' とが新たに繰り返される循環の出発点になる場合にも、G' や P' が生みだされた形態は消え去り、新たな過程を始めるのは再び G または P である。しかし、循環

$W' \cdots W'$  では、循環が同じ規模で更新される場合でも、出発点の  $W$  は  $W'$  として表わされねばならない。すなわち、循環  $W' \cdots W'$  は、資本価値で始まるのではなく商品形態で増殖された資本価値で始まり、「はじめから、単に商品形態で存在する資本価値の循環だけではなく剰余価値の循環をも含んでいるのである。」<sup>33)</sup>

商品資本の循環  $W' - G' - W \cdots P \cdots W'$  では、循環は二つの流過程で始まっている。次に  $P$  がつづき、この生産過程の結果として  $W'$  で循環が終わる。商品資本の形態での産業資本の再現とともに、循環はまた新たに流通段階  $W' - G'$  から開始されねばならない。生産資本の循環でも同じで、ともに貨幣に再転化した増殖された資本価値で終わっていないので、循環形態は終わっていない。したがって再生産がそこには含まれていることになる。<sup>34)</sup>

$W' - W'$  という形態は、総商品生産物の消費が資本そのものの循環の正常な進行の条件として前提されているし、商品形態にある資本が前提されている。また、この循環では、最初に前貸しされる資本価値はただ運動を開始する極の一部分をなしているだけであり、したがって運動ははじめから産業資本全体の運動として示されている。 $W' - W'$  では、総生産物（総価値）が出発点なのだから、そこでは生産性に変化がなくても拡大された規模での再生産が行われるのは、ただ（対外貿易を無視すれば）剰余生産物中の資本化される部分のうちに追加生産資本の素材的諸要素がすでに含まれている場合だけだということが示されている。<sup>35)</sup>

資本にとっての市場は、資本の循環、姿勢転換である。ここでは、二つの問題領域がある。第一の領域は、流通で起きる阻害の問題である。この阻害の問題は、資本の総循環にかかわるもので、「化体」の偶然性、変則的な形態転換を、資本の総循環として捉えたものである。資本の総循環と捉えたときに、資本競争を捨象して、現象を純粹に捉えることができる。それは、資本による市場の統括の限界を示すものである。また、「化体」の偶然性、変則的な形態転換は、資本の循環を生産資本の循環として捉えたものである。そこでの流通は、連続する再生産を媒介するだけのものである。第二の領域は、資本の姿態変態の領域であり、資本循環には三形態がある。資本循環の一般的定式は、貨幣資本の循環である。そこでは、姿態変態とともに質的変態が現れる。また、この貨幣資本の循環は、 $G \leftrightarrow G'$  という資本の物神性（呪物性）を示すものであり、資本の循環における貨幣がもつ重要性を表している。さらに、資本の循環の形態を取り上げることは、循環の正常な進行の条件、再生産を理論的に説明可能にする。それは、資本の営為、資本の本性を暴露するものである。

3) レーニン「いわゆる」市場問題について」邦訳『レーニン全集』第1巻、大月書店、1953年、96ページ。

4) 同上書、97ページ。

5) アダム・スミス『諸国民の富』大内・松川訳岩波文庫(188-92ページ)。

6) 同上書、124ページ。

7) 同上書、147-148ページ。

8) マルクス「フォイエエルバッハ」邦訳『全集』第3巻、大月書店、1963年、17-18ページ。

9) 同上書、27ページ。

10) 同上書、46ページ。

11) 同上書、49ページ。

- 12) 同上書, 55ページ。
- 13) マルクス「資本論」I a 邦訳『全集』第23巻第1分冊, 大月書店, 1965年, 143ページ。
- 14) 同上。
- 15) アダム・スミス『国富論』大内・松川訳岩波文庫(2)10ページ。
- 16) 同上書, 9ページ。
- 17) マルクス『経済学批判要綱』第2分冊, 邦訳『マルクス資本論草稿集』②, 大月書店, 1993年, 162ページ。
- 18) スミスは, 分業から貨幣を説明する。
- 19) マルクス「資本論」I a 邦訳『全集』第23巻第1分冊, 大月書店, 1965年, 191～192ページ。
- 20) 同上書, 192ページ。
- 21) 同上書, 195から196ページ。
- 22) 同上書, 207ページ。
- 23) 同上書, 214ページ。
- 24) マルクス「資本論」II 邦訳『全集』第24巻, 大月書店, 1966年, 35ページ。
- 25) 同上書, 45ページ。
- 26) 同上書, 48ページ。
- 27) 同上書, 48ページ。
- 28) 同上書, 51ページ。
- 29) 同上書, 65ページ。
- 30) 同上書, 81ページ。
- 31) 同上書, 81ページ。
- 32) 同上書, 106ページ。
- 33) なお, 「W'がある一つの産業資本の循環のなかでWとして現われるのは, この資本の形態としてではなく, 生産手段がその生産物であるかぎりの別の一つの産業資本の形態としてである。第一の資本のG—W(すなわちG—Pm)という行為は, この第二の資本にとってはW'—G'である。」同上書, 108～109ページ。
- 34) 同上書, 115～116ページ。貨幣に再転化して, はじめてこの運動は資本の運動と収入の運動に分かれる。
- 35) 同上書, 116～123ページ。

## 第2章 市場における価格変動と競争

### 第1節 需要・供給と価格変動

需要と供給は, 価格の運動と関連する。ミクロ経済学では, 競争市場において, 需要と供給が作用しあって「市場価格」を決定する。この「市場価格」が「均衡価格」を上回って<sup>36)</sup>いけば超過供給が発生し, 企業は価格を下げ販売量を上げて売れ残りをなくそうとする。「均衡価格」よりも低い「市場価格」では超過需要が発生し, 市場は価格を均衡水準まで上げさせるように調整される。「競争的市場経済で, 実際の取引価格がこのように需要と供給を一致させる均衡価格に調整されることを需要・供給の法則 law of supply and demand と呼ぶ。<sup>37)</sup>この「均衡価格」が成立すると, 価格と数量を変えようとするインセンティブは喪失する。資本の本性を抜きにした市場均衡の静態論の帰結である。

需要と供給との関係からは、それが作用する基礎が延べられてからでなければ、何事も説明されない<sup>38)</sup>。すなわち、商品の生産に必要な労働時間が減れば価格が下がり、反対に労働時間が増せば価格は上がる。このように商品価格は、それが最初にどのようにして互いに確定または規定されようとも、価値法則に支配されるのである。価格が価値に一致するためには、商品交換が偶然的、臨時的な交換でなく、直接的な交換ではどちらの商品も相互の欲望に一致して生産されること、販売で自然的または人為的独占でない市場では、価格は価値に一致する<sup>39)</sup>。

ミクロ経済学では、需要はどのように分析されるのか。需要概念は、所与の価格のもとで個々の経済主体が購入しようとする財やサービスの量を表す。需要量は個々の経済主体が「直面する予算制約のもとで選択された量であり、予算制約や嗜好が変化するときには、需要量は変化する」ものとされている。価格と需要量の関係は需要曲線で、市場全体の需要量は、個々の需要量の合計として市場需要曲線で表される。価格上昇がどれだけ需要量を減少させるかは、個々の財ごとの需要曲線の傾き、すなわち需要の価格弾力性で示される<sup>40)</sup>。供給については、所与の価格のもとで個々の経済主体が販売したいと考える財やサービスの量で表される。価格と供給の関係は、需要の場合と同じように供給曲線、市場供給曲線、供給の価格弾力性で示される<sup>41)</sup>。

たしかに市場における価格の変動は、買い手売り手の需要供給に規定されている。しかし需要供給の関係が価格決定、ひいては「均衡価格」を成立させるものとするところに静態論としての限界が現れる。この場合の限界は、後述する「競争の叙述」にかかわるものである<sup>42)</sup>。それでは市場における価格の運動とは如何にとらえられるのか。この問題に若干立ち入った考察を加えよう。

マルクスが仮定した諸生産部面の商品が互いに価値通りに売られるということの意は、「ただ、商品の価値が重心となって商品の価格はこの重心をめぐる運動し価格の不断の騰落はこの重心に平均化されるということだけである。」<sup>43)</sup>この「重心」こそ市場価値である。この市場価値は、個々の商品の個別的価値とは区別されるものである。個別的価値は、ある商品は市場価値より高くある商品は市場価値より低いであろう。市場価値は、一面では一つの生産部面で生産された諸商品の平均価値、他面ではその部面での平均的諸条件で生産されその生産部面の生産物の大量をなす諸商品の個別的価値ともみられる。「市場価値はそれ自身市場価格の変動の中心なのである」といっても市場価格は同じ種類の商品では同じなのである。平均価値での、すなわち両極の中間にある大量の商品の中位価値での、商品の供給が普通の需要をみたす場合には、市場価値よりも低い個別的価値をもつ商品は特別剰余価値または超過利潤を実現するが、市場価値よりも高い個別的価値をもつ商品はそれ自身が含んでいる剰余価値の一部分を実現することができないのである<sup>44)</sup>。価格の規制は多様である。ある一つの商品種類は、ある価格で市場のある範囲を占めることが可能である。より高い価格がより少ない商品量の場合やより低い価格がより大きい商品量の場合には、価格が変わっても市場に占める範囲は同じである。需要が非常に大きく最悪の条件で生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないならば、このような商品が市場価値を規定する。生産される商品量が中位の価値で売れる程度よりも大きければ、最良の条件で生産される商品が市場価値を規制する。市場価値についていえることは、生産価格についてもいえることである。「生産価格は、それぞれの部面で規制されており、また特殊な事情に応じて規制されている。しかし、生産価格そのものがまた、日々の市場価格がそれをめぐって運動し一定の期間にそれに平均化される中心なのである。」<sup>45)</sup>

価格がどのように規制されても、「価値法則は価格の運動を支配する。この支配は、生産に必要な労働時間の増減が生産価格を上下させるということによって行われる。」この生産価格を規定するのは、平均利潤である。「諸商品の総価値は総剰余価値を規制し、この総剰余価値はまた平均利潤の高さ、したがってまた一般的利潤率の高さを規定する——一般的法則として、または諸変動を支配するものとして——のだから、価値法則は生産価格を規制する」<sup>46)</sup>のである。

市場価値や市場価格は、ある一つの部面において競争によって形成される。また、競争は、諸部面のそれぞれの利潤率を平均化するような生産価格を成立させる。この生産価格の成立は、資本主義的生産様式のより高い発展が不可欠である。個々の事情で生産れる諸商品の市場価値が市場価格と一致するには、売り手の間の競争が十分であり、社会的欲望に応えられる商品量の供給が必要である。この一致する過程では、市場価値から市場価格がより高くあるいは低く変動する。また、市場価値が上下すれば、平均的に社会的欲望は逆方向に変動し、総商品量の売れる条件が変動する。それゆえ、「需要供給が市場価格を調整するとすれば、またはむしろ市場価値からの市場価格の偏差を調整するとすれば、他方では市場価値が需要供給関係を、または需要供給の変動が市場価格を振動させる中心を、調整するのである。」<sup>47)</sup>こうして、個々の商品の価値にあてはまる諸条件が、一つの商品種類の総量の価値にあてはまる諸条件として再生産されるのである。以上がマルクスの展開するところである。

ここで、需要供給についてのマルクスのいうところを、今少し見ておこう。まず、供給であるが、供給とは、市場にあるかまたは市場に供給可能な生産物であり、大まかにいうと一定の各産業部門の年間再生産の量と見ることができる。この商品量は、人間の欲望をみたます使用価値であるだけでなく、それが使用価値のある大きさとして市場にあるのである。また、この商品量は一定の市場価値をもち、この市場価値は容量ないし個数で表される単位商品量の市場価値の倍数で表される。ということは、市場にある商品量の大きさとその商品の市場価値との間に必然的關係はないということである。あるのは、生産部面で違うが、労働の生産性の一定の基礎の上では、それぞれ特殊な生産部面で一定量の商品には一定量の社会的労働時間が必要だという関係である。需要は、生産者からも消費者からも生じる。また、この需要は、与えられた量の社会的欲望にもとづくものであるが、この欲望の量的規定は、その固定的な外観にもかかわらず弾力性のある変動しやすいものである。需要の側に与えられた量の社会的欲望があり、供給の側にはいろいろな生産部門での一定量の社会的生産が対応しているかのようだが、現実の社会的な欲望は商品の貨幣価格の変動とか買い手の貨幣事情や生活事情の変動し、諸商品にたいする市場で代表される欲望と量的に相違している。このように、需要と供給との不均衡、その結果としての市場価値からの市場価格の偏差を見ることは別に難しいことではない。

問題は、この市場価値が需要と供給からは説明できないことにある。需要と供給が一致すれば、それは作用しなくなり、だからこそ商品はその市場価値で売られるのである。<sup>48)</sup>この市場価値は、価値からの転化としてのみ説明されるのである。

ところが、ミクロ経済学は、市場価格が均衡価格に調整されることを需要・供給の法則と呼んでいる。この均衡価格は、需要曲線、供給曲線のシフトによって変動する。このように、均衡価格それ自体が動くものとされる。その限りでは、均衡価格の成立は、経過的なものとなり、需要曲線、供給曲線のシフトの影響は、価格変化と取引数量の変化をもたらす。ミクロ経済学は、需

要供給関係の作用の解消を克服して、価格変動の動態的分析へと繋いだかに見えるが、それは「時間」の問題を「将来価格の期待」と「リスク」の問題として提起することとしてであった。<sup>49)</sup> これに対してマルクスは、「均衡のとれた生産」というのは、「これは、適正な比率で自らを配分しようとするのが資本の傾向であるというかぎりでのみ言えることであって、また同じく、一資本は剰余労働 [Surplusarbeit] を、過剰生産性 [Surplusproductivität]、過剰消費 [Surplusconsumum] 等々を、際限なく追い求めるのだから一均衡を乗り越えて突き進もうとするのも、資本の必然的な傾向なのである。」<sup>50)</sup> とする。なお、マルクスにおいては、需要供給は、価値の市場価値への転化を前提として論じられていることに注意しなければならない。

## 第2節 市場における競争

競争について、マルクスが如何にとらえていたか、また、マクロ経済学が、競争をどのように扱ってきたか、まずそのことから検討することにしよう。

マルクスは、資本主義的生産における競争は、生産物の価値がその生産に必要な労働時間によって規定される、という法則を貫徹させるとする。労働時間が交換価値の尺度として役立つということは、生産に必要な労働時間が新技術で短縮される時、市場にある同種のすべての生産物を減価させるという「労働の不断の減価の法則」<sup>51)</sup> になる。

ミクロ経済学では、政府の役割が捨象された基本的競争モデルが措定される。この基本的競争モデルは、消費者行動の仮定、企業行動の仮定、消費者と企業の相互依存の仮定をもって構成されている。個人と企業の行動仮定は、費用と便益とを基準とする合理的選択 (rational choice) によって行動するものとされている。消費者と企業の相互依存は、ともに価格受容者またはプライス・テイカー (price taker) としての相互関係であり、そのような市場は完全競争市場である。市場における企業や個人の合理的行動は、企業では利潤の一部を、個人でも所得の一部を保留できることがインセンティブとなる。つまり企業も個人も所有権をもちそれを行使できることである。そして、個人や企業の合理的行動は、利用可能な選択肢の集まりである機会集合 (opportunity set) と機会費用、サンクコストなどの費用概念が選択肢としてかわり、選択を制約するものとして資金によって制限される予算制約 (budget constraints)、時間で制約される時間制約 (time constraints)<sup>52)</sup> がとりあげられる。

このミクロ経済学の基本的競争モデルにおいて、需要と供給が一致する市場均衡が成立する。また、この均衡は、生産物市場、資本市場、労働市場のそれぞれにおいて、他の市場を捨象した部分均衡が成立する。それは、それぞれの市場ごとの競争によって成立したものである。しかし、現実の市場均衡においては、他の市場との関係、それぞれの市場の競争を超えたすなわち市場間競争によって、一般均衡が成立する。部分均衡から一般均衡にいたる過程は、一つの市場均衡の攪乱が他の均衡市場に影響して攪乱するが、そこでの均衡はやがて初めの市場にはね返って均衡を最終的に新たな均衡として回復させる。こうしてすべての市場の均衡が成立するという一連の過程である<sup>53)</sup> とされている。

ミクロ経済学の競争では、自由競争についての説明は全くない。ただ、独占や規制などにたいする否定として理解されているだけである。こうした批判は、すでに、マルクスが批判したところである。そのマルクスは、「概念的には、競争とは、多数の資本のあいだの相互作用として現

われ実現される資本の内的本性、資本の本質的規定にほかならず、外的必然性としての内的傾向にほかならない。（資本は、多数の資本として存在するのであり、また多数の資本としてしか存在しえない。だからこそ、資本の自己規定が多数の資本のあいだの相互作用として現われるのである。）資本は、均衡のとれた生産の、たえざる措定であると同様に、たえざる止場でもある。現存の均衡は、剰余価値の創造と生産諸力の増大とによってつねに止揚されずにはいない。だが、生産は同時にかつ一斉に同一の比率で拡大さるべきだという、[均衡のとれた生産という]この要請は、資本そのものからはけっして出てこないようなもろもろの外的要請を資本に負わせることになる。<sup>54)</sup>」

また、競争一般は、ブルジョア経済の諸法則をうち立てるのではなく、それらの執行者である。それゆえ、無制限の競争 [illimited competition] は、リカードウがいうような経済諸法則の真理の前提ではなく、その諸法則の必然性が実現される現象形態として、結果であるというのが、マルクスの理解である。<sup>55)</sup> また、マルクスは、次のようにいっている。「だが自由競争は、もちろん資本の生産的な過程の妥当な形態である。自由競争が発展すればするほど、資本の運動の諸形態はそれだけ純粋に現われてくる。…資本が弱いあいだは、資本自体がまだ、過去のものとなったあるいは資本の出現とともに過去のものとなりつつある生産諸様式という支えを探し求める。資本は、自己を強力なものだと感じるようになると、これらの支えをすてさり、それ自身の諸法則に従って運動するようになる。資本は、自己自身を発展の制限と感じ、そのように意識しはじめると、自由競争を抑制することによって資本の支配を完成するようにみえる諸形態に逃げ道を見いだすのであるが、そのことによって同時に、これらの形態は、資本解体の、また資本に立脚する生産様式の解体の告知者でもあるのである。資本の本性のうちにあるものが、外的必然性として実在的に表出、措定されるのは、ただ競争によってのみであるが、この競争は、多数の資本が資本の内在的諸規定を相互に強制しあい、また自分自身に強制する、ということ以外のなものでもない。だから、ブルジョア経済のどんな範疇でも、たとえば価値の規定のような最初の範疇で [さえ] も、それらがはじめて現実的なものになるのは、自由競争によって、すなわち、諸資本間の相互作用として、また資本によって規定される他のあらゆる生産関係と交易関係の相互作用として現われる、資本の現実的過程によって [以外] ではないのである。<sup>56)</sup>」という。

結局、マルクスにおいては、競争は、資本の内的諸法則を個々の資本に対して強制法則たらしめるだけであり、内的諸法則をつくり出すのではなく、実現するのだということである。しかも、資本の内的諸法則を外見的必然性として資本に強制するために、外見上それらを転倒させる。資本の内的諸法則の理解を始めるにあたっては、価格は価値の形態変化したもの、すなわち価値が貨幣で表現されたに過ぎないものとして捉えられている。この価格の大きさは資本の生産過程において前提されている。このことによって資本は価格を規定するものとして現われ、資本によってなされる前貸+資本によって生産物のうちに実現された剰余労働によって規定されている。しかし競争の強制法則は、現実の総生産費が価格を規定するものとして現われるのに、価格が生産費を規定するものとして現われる。競争は、資本の内在的諸法則を外見的必然性として資本に強制するために、これらの法則を外見的に転倒させるのである。ここで、はじめてミクロ経済学の価格論とは同一の次元に立つことになる。しかし、競争一般は、ブルジョア的経済の諸法則を創設するものではなく、すなわち経済的諸法則の前提ではなく、そこで諸法則の必然性が実現する現

象形態である。<sup>58)</sup>これが、マルクスの競争についての理解である。

また、リカードがいうところの「均衡のとれた生産」、それはミクロ経済学がいうところの「市場均衡」、すなわち均衡価格に調整された供給（市場全体の供給）である。マルクスでは、価値を規定するのはその生産に要する時間の最小限であり、ミクロ経済学では、「競争市場においては、あらゆる産物、最も低い費用でかつ最も効率的に生産できる企業によって生産される<sup>59)</sup>」という「均衡のとれた生産」ということは、「適正な比率自らを配分しようとするのが資本の傾向であるというかぎりでのみ言えることであって、また同じく、一資本は剰余労働 [Surplusarbeit] を、過剰生産性 [Surplusproductivität]、過剰消費 [Surplusconsum] 等々を、際限なく追い求めるのだから一均衡を乗り越えて突き進もうとするのも、資本の必然的な傾向なのである。」<sup>60)</sup>競争においては、資本のこのような内的傾向は、他の資本による強制であり、均衡をこえて駆り立てる強制である。

そこで、問題となるのは、それでは競争について『資本論』の枠外に残されたものは何かということである。マルクスが『資本論』第3巻第1篇第6章「価格変動の影響」で取り上げた諸現象は、「信用制度と世界市場」とを捨象している。この章では、一般的に取り扱うことができる現象、「資本の増価と減価、資本の遊離と拘束」であり、これらの現象は「まず第一に互いに関連しており、第二には利潤の率にも量にも関連している<sup>61)</sup>」。

また、市場競争は、需要供給と分配をどのように扱うかという問題である。需要供給のより深い分析には、社会の総収入を相互のあいだで分配して収入として相互のあいだで消費するようないろいろな階級や階級部分の存在が前提される。同時に他方では、生産者たち自身によって彼ら相互のあいだに形成される需要供給の理解のためには、資本主義的生産過程の総姿態の認識が必要となる。<sup>62)</sup>市場競争において、不断の不均等が不断の均等化するには、(1)資本の可動性が必要であり、(2)労働力の可動性が不可欠である。第一のことは、商業の完全な自由、資本主義的生産様式から生まれた独占以外の独占の排除、信用制度の発達、資本家のもとへのさまざまな生産部面の従属、人口密度が大きいことが前提となる。第二のことは、労働者の移動を禁じる法律の廃止、労働の内容にたいする労働者の無関心、生産部面の労働が可能な限り単純労働に還元されること、労働者のあいだの職業的偏見が無くなること。資本主義的生産様式への労働者の従属が前提となる。これ以上のことは、「競争に関する特殊研究」に属すると、マルクスはいう。<sup>63)</sup>さらに、「労働力の価値以下への労賃の引き下げ」は、「資本の一般的分析には関係のないことなので、この著作（『資本論』一引用者）では取り扱われない競争の叙述に入れるべきこと」として<sup>64)</sup>いる。貿易については、先進国は貿易で超過利潤をあげ、植民地投資で高い利潤率を上げる。ところが貿易は、国内では資本主義的生産様式を発達させ、不変資本に比べて可変資本の減少を進展させ、他方外国との関係で過剰生産を生み、したがってまたいくらか長い期間にはやはり反対的作用をもたらす。<sup>65)</sup>このように法則的作用を弱めることは、競争で叙述される問題であるとしている。また、資本主義的生産様式が進むにつれ、小売商業に割り込むことが容易になるにつれ、投機が盛んになり遊離した資本が過剰になるにつれ、全然または半ば機能していない商人資本（商品取引資本および貨幣取引資本）が増大する。これも「諸資本の競争」で扱われる問題とされる。<sup>66)</sup>

マルクスにおいて、「競争の叙述」は、資本の特殊的分析である。ここでいう特殊的分析とは、利潤率および利潤率の傾向的低下の法則に影響する競争に関する特殊的研究である。それは、産

業資本に関連してまずは明らかにされるものである。その場合にも、信用制度の発展は関係する。また、この特殊的研究にとって、商人資本、利子生み資本の形態における競争の分析のためには、貿易および信用制度の発展を考慮する必要がある。信用制度は、弾力的な生産過程が極限まで強行されて、過剰生産や商業での過度な投機の主要な槓杆となる。すなわち、資本主義的生産の対立的な性格にもとづいて行われる資本の価値増殖は、現実の自由な発展をある点までしか許さず、したがって実際には生産の内在的な束縛と制限とをなしているのであって、この制限は絶えず信用制度によって破られる。それゆえ、信用制度は生産力の物質的發展と世界市場の形成とを促進するが、これらのものを新たな生産形態の物質的基礎としてある程度の高さに達するまでつくりあげることは、資本主義的生産様式の歴史的任務なのである。それと同時に、信用は、この矛盾の暴力的爆発、強行を促進し、したがってまた古い生産様式の解体の諸要素を促進する<sup>67)</sup>というのが、マルクスの主張するところである。

- 36) ここでの市場にたいする認識は、スミスとは異なっていることに、留意すること。
- 37) ジョセフ・E・スティグリッツ著・藪下史郎他訳『スティグリッツ・マイクロ経済学』東洋経済新報社、1995年、17ページ。
- 38) マルクス『資本論』Ⅲa, 邦訳『全集』第25巻a, 大月書店、1966年、229ページ。
- 39) 同上書、224ページ。
- 40) 『スティグリッツ・マイクロ経済学』, 13~15ページ。
- 41) 静態論に対比される動態論としての分析は、外的攪乱としての「与件変化」ではなく、J. A. シュンペーターのいう「発展」としてとらえるとしても、依然として「与件変化」である。
- 42) 同上書、14~16ページ。
- 43) 「資本論」Ⅲa, 224~225ページ。
- 44) 同上書、225ページ。
- 45) 同上書、226ページ。
- 46) 同上書、226~227ページ。
- 47) 同上書、228ページ。なお、市場価値の決定は、抽象的にいえば、現実の市場では買い手たちの間の競争によって媒介される。
- 48) この作用の解消は、さまざまな形で実現する。この点については、同上書、239~240ページを参照のこと。
- 49) 『スティグリッツ・マイクロ経済学』, 18~26ページ。
- 50) マルクス『経済学批判要綱』第2分冊、22~23ページ。
- 51) 『哲学の貧困』全集4, 93~94ページ。『選集』①313ページ。
- 52) 『スティグリッツ・マイクロ経済学』, 7~10ページ。
- 53) 同上書、305~306ページ。
- 54) マルクス『経済学批判要綱』第2分冊、23ページ。
- 55) 同上書、237ページ。資本の内的法則は、自由競争が発展する限りにおいて、またその範囲内でのみ、はじめて法則として措定されるし、資本のうえにうち立てられた生産は、それにふさわしい諸形態をとるのである（同書、408ページ）。
- 56) 同上書、409~410ページ。
- 57) 同上書、578~579ページ。
- 58) 同上書、237ページ。
- 59) 『スティグリッツ・マイクロ経済学』, 274~275ページ。

- 60) マルクス『経済学批判要綱』第2分冊, 22~23ページ。
- 61) マルクス「資本論」Ⅲa邦訳『全集』第25巻a, 大月書店, 1966年, 140ページ。
- 62) 同上書, 245ページ。
- 63) 同上書, 246~247ページ。
- 64) 同上書, 295ページ。なお, 経験的事実としてあげているのは, 利潤率の低下への傾向を阻止する重要な原因の一つだからという。
- 65) 同上書, 298~301ページ。
- 66) 同上書, 388ページ。
- 67) 同上書, 562~563ページ。

## む す び

市場の経済学上の意味を明らかにするために、売り手と買い手の関係したがってまた分業についての叙述から開始した。それは、商品交換から貨幣の成立を、そして貨幣の資本への転化を、市場の分析において明らかにするためであった。市場における資本は、資本の流通、再生産が主要な内容をなしている。なお、資本による生産過程の支配は、労働力（商品）の消費過程、そこでの剰余価値生産こそが主題であることから、本稿では、とりわけて問題とはしなかった。賃労働に関しては、それ自体として分析・叙述されるものである。賃労働を、それ自体として分析するのは、資本の大流通にたいして小流通、つまり資本流通に従属する流通であるから、資本の流通が解明されたいと叙述可能となるからである。したがって、マルクスが『資本論』で扱ったのは、資本流通に関係する限りにおいてである。

次に、価格変動については、需要供給からは、資本主義的生産の法則も明らかにしえないということであった。市場価格の変動の重心となる市場価値は需要供給からは説明しえないし、価格がどのように規制されても、価値法則が価格運動を支配し、生産に必要な労働時間の増減が生産価格を上下させることによって支配するのである。市場における競争の役割は、資本主義的生産における競争が、生産物の価値がその生産に必要な労働時間に規定されるという法則を貫徹させることである。すなわち、競争一般は、資本主義的生産の諸法則をうち立てるのではなく、その諸法則の必然性が実現される現象形態であるに過ぎない。とはいえ、競争には、資本の特殊分析として叙述されるべき内容がある。こうした「競争の叙述」は、今後の研究課題である。この「競争の叙述」において、ミクロ経済学が扱う領域が、市場価格を重心とする生産価格の変動の具体的過程として解明されることになる。そこでの重要な問題は、市場価格と生産価格の一致が、社会的欲望に合致する商品—ここではいわゆる財とサービスといってもよい—が提供されることでなければならない。もし、市場にたいするコントロールを考えるならば、社会的欲望に合致する市場価格と生産価格の一致をいかに保障するかの問題を明らかにしなければならない。しかも、競争と資本の本性にたいする規制を通じての保障である。この規制がなければ、景気循環がまた恐慌がさげられない。こうした課題は、次に解明されるべく本稿では残された課題となっている。

ところで、マルクスの「経済学」における市場に関する整理は、今日いかなる意味をもっているのか。それは、今日現段階における市場問題とは何かを、確認することと関連している。この確認は、経済学において、市場はいかなる意味をもっているかを明らかにすることによってのみ、

経済学上の課題として確立する。

「競争の叙述」を今後の研究課題として残してはいるが、それでも本稿で整理した内容から言えることは、資本の過剰蓄積とその処理こそ現段階における市場問題だということである。国民経済としての資本の過剰蓄積<sup>68)</sup>は、現実資本はもとよりとりわけ貨幣資本の過剰蓄積を煽った信用制度、そして過大な信用創造による拡大再生産であり、いわゆる“バブル経済”はその現象形態である。この過剰蓄積とその処理は、信用制度と信用創造にたいする僅かなきっかけで始まり、急速かつ広範な資本減価をもたらす。こうした一連の事態は、貿易と信用が国民経済における利潤率の傾向的低下の法則に影響するという規模での問題である。なお、この影響は、競争の強制によって、市場生産価格を媒介として波及する。利潤率の傾向的低下の法則がもたらす諸結果、それこそ現段階の市場問題である。さらに、資本の過剰蓄積の処理は、それがもたらす諸結果<sup>69)</sup>とともに、「合理的な経済秩序」<sup>70)</sup>の形成について、あらためてその方向を示すことを課題として提起する。これこそ、今日の市場問題に他ならない。経済学の課題は、今日・現段階の市場問題の解明にあり、マルクス「経済学」としては、資本の特殊分析のための「競争の叙述」における経済学の研究を志す者の営為にあるといえよう。同時にそれは、市場にたいする中央政府のコントロールの手法を解明することであろう。

68) 資本の過剰蓄積について、『国家独占資本主義』にとっては、信用創造こそ、とりわけ今日では重要な意味をもっている。

69) 大量・長期・高率の失業だけではない。失業が基幹的労働者、事務部門及ぶことだけでもない。「繁栄の中の『貧困』」への対応が、アメリカの大統領選の争点となるという現実（『朝日新聞』2000年1月5日朝刊）に留意する必要がある。

70) F. A. ハイエク『市場・知識・自由—自由主義の経済思想—』第2章社会における知識の利用参照。